

2026年1月6日(エピファニー＝公現日)「初心に帰ってマルコ福音書を読む」会



©田中知雄

『礼拝する博士たち』

1965(昭和40)年 油彩・キャンバス F20号(60.8×72.9)

個人蔵

今は世界中にクリスマスプレゼントを贈り合う習慣が根づいてきているが、その第一号がこの『礼拝する博士たち』に描かれている場面である(マタイによる福音書2:1-11)。もちろん田中忠雄も、様々な種類の降誕図を多数描いているが、これはその中でも少しユニークな構図になっている。王位にあったとも言われている来訪者たちに気を遣ってか、貧しい聖家族は馬小屋の中ではなく屋外に出て博士たちと向かい合っている。生まれたばかりのはずの主イエスも飼葉桶の中ではなく母・マリアの膝の上に座っており、幼な子らしく博士たちの捧げ物に興味を示し、手を伸ばしている。





「洗礼者ヨハネによるイエスの洗礼」
(1334 年頃)。聖ヨハネとイエスは、
3本の指を上げて祝福の印を掲げてお
り、雲から手を差し伸べる父なる神、
鳩で象徴される聖霊なる神、そして子
なる神であるイエスの三位一体を象徴
しています。

アルメニア福音書（キリスト教の福音
書の一部を収録した書物）より。典礼
で使用されました。



パトモス島の“神学者”聖ヨハネ修道院内にある
フレスコ画：ギリシア南東部、エーゲ海に浮
かぶドデカニソス諸島の島にあり、この修道
院を含む一帯はユネスコ世界遺産指定を受け
ています。この島はローマ時代の流刑地で、
西暦94年、聖ヨハネが流刑中に福音書と黙
示録を著した所です。聖ヨハネ修道院は11
世紀の建立。島の中央に“黙示録の洞窟（黙
示録修道院）”があります。歴史地区ホーラ
（「主要な町」の意）は、修道院の黒ずんだ
城壁を白く取り囲んで広がっており、古くは
16世紀の建造です。



さあ、私が今あなたにしてほしいことを記そう。礼拝に集まった時には、各々、全ての
人にとって役立つものを準備しなさい。つまり、詩編を歌う

こと、教えを説くこと、物語を宣べ伝えること、祈りを導くこと、洞察力を養うことを、
それぞれ備えて集まることにしなさい。

——コリントの信徒への手紙（一） 14章26節

マルコが伝えた「良い知らせ」

——マルコ伝福音書 訳述——

川上直哉

神様の わが子と慈しみなされる 尊き方、

私たちを助ける人 イエスと呼ばれたキリストの、

その「良い知らせ」の そのものの物語。

それから、イエス様はまた船で反対の岸へ行きました。有象無象、大勢の人々が、イエス様を目指して集まっていました。イエス様が湖の岸辺にいますと、一人の人がやってきました。地域の公民館の管理を任されている名士で、ヤイロという名前の人でした。ヤイロはイエス様を見つけると駆け寄ってその足元で土下座をし、何度も何度も、こう言って頼みました。「私の娘が、いよいよ、危ないのです。」「来てくださいませんか。」「手当をしてくださいませんか。」「そうです、そうしてくだされば、きっと、娘は治って、生きれるかもしれないと、そう思って・・・。」それで、イエス様はヤイロと一緒に出発しました。ヤイロが先に立っていきます。大勢の群衆が押し合いへし合い、周りを取り囲んで、ゆっくりと、イエス様は進んで行かれます。

そこに、一人の女性がいました。顔ににじむ決死の形相を布で隠して、群衆のなかに紛れていました。もう12年も、病んでいました。不正出血が止まらないのです。何人もの治療師に診てもらいました。そのために、彼女は全財産

を使い果たしました。でも、何の甲斐もなく、ただ、病気は悪くなっていくばかりの12年でした。

この当時、「血」は「いのちそのもの」と思われていました。そして、「いのちそのもの」は「恐ろしいもの」と思われ、「血」に触れたものは「穢れる」とされて、一定期間の隔離生活を強いられました。また、「穢れた人」と接触した人も、やはり一定の隔離生活を強いられました。それはつまり、ある種の「感染症対策」でした。そうして、この時代のこの地域の人々は、社会を維持していたのです。いつも下着に血がついてしまう彼女は、独特の臭いにも付きまといわれて、この12年間、人から離れて暮らす毎日を送ってきました。そんな彼女の耳に、イエス様のうわさが聞こえてきました。「腕がいい治療師だ」「ただで診てくれるらしいぞ」――彼女は決意しました。彼女の病を憎み嫌う人々のなかに、病の体ごと、飛び込んでいったのです。何人もの人の肩が当たり、足を踏み・踏まれ、あるいは布で隠した頭をねじ込むようにして、ついに彼女はイエス様のところまで、人をかき分けて到着した。そして彼女は、その服に触れました！――「そんなすごい先生なら、その服に触れるだけで、私の病気も治るかもしれない」と、彼女は常々、言っていたのです。心臓はハカハカと高鳴り、周りの雑踏は頭の中の遠くで響き、目がくらむような思いをしながら、決死の覚悟。そして彼女は、イエス様にたどり着いた。人々をかき分け進んだその時間は、何時間にも及んだように思いますし、でも、一瞬だったようにも思えます。そして、触った！その瞬間です。彼女の体の奥で、出血が止まった。彼女はそれを、自分の体ではっきり感じ取りました。

その時です。恐ろしいことが起こりました。イエス様が立ち止まったのです。何かを感じ取られたようです。「力が、出ていった」と、イエス様は気づきました。そして振り返り、こう言いました。「誰か、私の服を触ったぞ！」弟子たちは驚いて、あるいは、半ば呆れて、こう言いました。「先生、見てください。こんなにたくさんの人が集まっているのですよ。そりゃ、誰かが先生の服を触ったでしょう。当たり前です！」それでも、イエス様は立ち止まったまま、後ろを見えています。その見回す目は、みんなをそこに立ち止まらせてしまいました。彼女は、逃げ場を失ったのです。

彼女は、恐怖に包まれました。「穢れた私」が、こんなに大勢の人々に触ってしまった。それを知ったら、この大勢の人々は、パニックになる。怒り狂う。私はもう、生きてここから出られない。そう観念した彼女は、震えながらイエス様の前に出てきて、土下座をして、ありのまま、すべて、震える声で打ち明

けました。その場は、凍り付きました。ものすごい大勢の人々が、濃厚接触者となった。「穢れ」は病をもたらすのです。みんな、恐怖に襲われて、声もない。

その沈黙を切り裂いて、イエス様はこう言いました。「お嬢さん、よく、信頼してくれました。その心が、あなたを癒したのです。さあ、安心して行きなさい！痛みも悩みも、吹き飛んだ。大丈夫、もう何も、心配ありません！」

そう言い終わらないうちに、公民館の管理人であるヤイロの家から人が来て、言いました。「お嬢様は、死にました。もうよろしいのです。先生のお手を煩わせることは、もう、なくなったのです。」この言葉がイエス様の耳にも入ります。すると、イエス様はヤイロに向かってこう言いました。「怖がってはいけません。ただ、信じていなさい。」そしてイエス様は「誰もついてこないように」と言ってから、ペテロとヤコブとその弟のヨハネだけを連れて、進んでいきました。

公民館の管理人であるヤイロの家に着くと、家じゅうが異様な雰囲気、嘆き悲しむ思いでいっぱいになっていました。イエス様はその家に入って言いました。「いったいどうしたのです？なぜ、泣くのです？この子は死んでなんかない。眠っているだけだ。」家じゅうの人はあっけにとられてから、イエス様の真剣な様子を見て、笑い出しました。かまわずイエス様は、みんなを外に出すように言ってから、子どもの両親を残し、一緒に来た人たちを連れて、子どもの遺体が安置してある場所へ入っていきました。そして、その子の手を取って、その子に向かって、イエス様がいつも使っていたアラム語で、こう言いました。「タリタ・クム」この言葉は「少女よ、あなたに言う、起きなさい」という意味です。するとすぐに、この子は起き上がり、歩き始めました。この子の年齢は12歳。つまり、不正出血で悩んでいたあの人の苦しみの月日と同じ時間を、この子は生きてきたのです。この日イエス様は、12年来の病を吹き飛ばし、12年来のいのちを救い上げた。それを見た人々は、本当に、驚いたことでした。

イエス様はきつく、こう命じました。「このことは、決して誰にも、知らせないように。」それからイエス様は「この子に何か食事を」と、おっしゃったのでした。